

令和6年4月11日

南の風第55回全国ミニバスケットボール大会特集号Ⅳ

南部地区ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

特集Ⅲ号の続きです。

吉岐リトルソニックスのハーフコートオフェンスです。ホーンセットを軸にしたものが3～4種類あるようです。11番や14番、また3番のエースの選手からサインが出てやっていました。

リングに向かってトップに11番、右エルボーに3番、左エルボーに14番、そして右フリースローの延長上に0番、左フリースローの延長上に2番というアライメントです。ホーンセットは通常両コーナーに選手を配置しますが、今回はコーナーの選手が上がった形です。(パラレルの状態と並ぶ)フリースローラインから下に選手が誰もいないため、ペイントや周辺に広いスペースが出来ています。

11番がトップでボールを持っています。まず0番が並んでいる選手の上をカットして逆サイドに行きます。この動きに合わせるように、2番がスペースを空けるためにペイントエリアを横切って逆サイドにカットします。トップの11番が0番にパスします。そのボールが空中にある間に、14番が3番のDefにアウェースクリーンを掛けます。3番は早目に動き出し(完全にスクリーンが掛かる前)、インフロントカットからペイントにダイブして、0番からパスを受けショットします。鮮やかに決まりました。

一連の流れは以上です。セットオフェンスは、理論上は上手くいくようにできていますが、実際はかなり習熟していないと試合で成功するのは難しいです。それを何回も全国大会でやり切り、シュートを決める吉岐チームの凄さは半端ではありません。スクリーナーの掛け方とユーザーの動き出すタイミング、スペースへの跳びこみ、パスの正確性が求められます。経験に裏打ちされた自信が感じられます。

今回の全国大会で吉岐チームが見せたセットは、**アウェースクリーンが共通のコンセプト**になっていました。ボールがパスされた反対側にスクリーンを掛け、インフロントやバックドアカットで攻めるということです。ベースとなるアウェースクリーンは、マンツーマンオフェンスの基本となるプレーの一つです。非常に参考になりました。

折角の機会なので、吉岐チームが使ったエンドやサイドラインのナンバープレーも紹介します。

一つ目は、エンドラインからボックス型です。リングに向かって右スロットラインの上が3番、下が2番、左スロットラインの上が14番、下が0番、エンドラインスロアーが11番です。審判が11番にボールを渡すと同時に、3番がクロスに0番のDefにスクリーンを掛けます。やや遅れて14番が、3番のDefにスクリーンを掛けます。3番は14番のスクリーンを使ってサークルカットして右ゴール下でボールを受けショットします。この時、2番が真っすぐリフトして自分のDefが3番のヘルプに行けないようにしていました。

もう一つはスロットラインスタックです。リングに向かって左スロットラインに、下から3番、7番、11番、0番と縦に並びます。スロアーは14番です。審判が14番にボールを渡す瞬間、7番が右のスロットラインにカットし、11番が左サイドラインの方向にカットします。3番が両手を上げて後ろに下がります。0番は3番の後ろ側からカットすると見せかけ、3番のDefにスクリーンを掛けます。3番はそのスクリーンを利用して、逆サイドのゴール下でボールを受けショットします。14番のパスが3番の跳びこむスペースにアジャストするのも見逃せません。次号が特集の最後となります。